

使徒の働き22章 「パウロの弁明の始まり」

1A 主イエスとの出会い 1-21

1B 同胞への共感 1-5

2B 天からの光 6-11

3B 兄弟による預言 12-16

4B 召命 17-21

2A 選り別れた器 22-30

1B 生まれる前 22-29

2B 信じる前 30

本文

使徒の働き 22 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは 21 章まで来ました。今朝は 22 章を一節ずつ見ていきます。

前回までの話を思い出してください。パウロの一行はエルサレムに到着しました。教会は、パウロを歓迎しましたが、しかし、彼について、各地でユダヤ人に割礼を施すな、慣習に従って歩むなという噂が伝わっている。だから、神殿で誓願を立てようとしている人たちと共に身を清め、彼らの費用も出してやりなさい、そうすれば、あなたも律法を正しく守っていることが分かるでしょう、とヤコブが助言しました。パウロは従いました。ところが、それでも騒動が起こりました。その連れて行った人々を、異邦人を連れ込んだと叫んだ者たちがいたのです。それで、パウロが神殿の敷地から引きずり出されて、殺されかけました。そこにローマの千人隊長が介入しました。パウロを群衆から引き離し、彼を兵営の中に入れようとしたのです。その階段を上る途中で、パウロが千人隊長に、ギリシア語で、「この人たちに話をさせてください(39 節)」と頼んだのです。パウロは、彼らに手をふり、彼らは静かになります。そして、ユダヤ人たちのことば、ヘブル語で話しかけます。そのことばが、22 章に書き記されています。

パウロは、これから弁明をしていきます。自分がいかに主イエスに出会ったのか、そして、どうして異邦人の間で福音を宣べ伝えているのかについての説明、弁明をします。それは彼らに受け入れられるものではありませんでした。ますます殺してやる！と騒ぎ立てます。そこで千人隊長は、再び彼を保護して、次にユダヤ人の最高法院に連れて行きます。パウロがかつて、議員の一人であった最高法院です。そこで、騒ぎになりました。それが 23 章に書いてあります。それで、千人隊長は引き出して、再び兵営に連れて行きます。そうこうしているうちに、ユダヤ人の中でパウロを殺害する陰謀を企てていました。それを耳にした千人隊長は、パウロがローマ市民なので、ローマ総督の駐在するカイサリアに送ったのです。そこで裁判が始まります。24 章では、フェリクスという

総督の前での裁判、25章ではフェリクスの次に総督になったフェストゥスの前での裁判。そして26章では、ユダヤ人の領主の一人、ヘロデ・アグリッパ二世の前での証言になります。ここ22章から26章までが、パウロの人々の前での弁明、証言が書いてあります。

パウロは、初めの十二人の使徒ではありませんが、イエス様はこれらのことを前もってそうなることを教えておられました。終わりの日が来る前に、人々に連れて行かれるようになっていっていました。「ルカ 21:12-15 しかし、これらのことすべてが起こる前に、人々はあなたがたに手をかけて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出します。13 それは、あなたがたにとって証しをする機会となります。14 ですから、どう弁明するかは、あらかじめ考えない、と心に決めておきなさい。15 あなたがたに反対するどんな人も、対抗したり反論したりできないことばと知恵を、わたしが与えるからです。」人々の前に訴えられる形で行くのですが、その弁明は、証しをする機会となるとイエス様は言われていたのです。既にペテロやヨハネが、最高法院の中で、イエスにこそ救いの名があると、はっきりと証しました。パウロは、宗教の権威者のみならず、世俗のローマの総督や王たちの前でも証します。

主は、私たちに証しを立てることを命じています。主イエスがどのようにして私たちに会ってくださったのか、その後、自分はどうなったのかを人々の前に明かすことです。しかも、それが、自分がキリスト者であることで反対する人がいる中で行うように命じられています。反対する人に反発するのでもなく、無視するのでもなく、弁明という形で、自分のキリストにある希望を話すのです。迫害下にいる信者に対して、使徒ペテロが励ましました。「I ペテ 3:14-16 たとえ義のために苦しむことがあっても、あなたがたは幸いです。人々の脅かしを恐れたり、おびえたりしてはいけません。15 むしろ、心の中でキリストを主とし、聖なる方としなさい。あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでも、いつでも弁明できる用意をしていなさい。16 ただし、柔和な心で、恐れつつ、健全な良心をもって弁明しなさい。そうすれば、キリストにあるあなたがたの善良な生き方をののしている人たちが、あなたがたを悪く言ったことを恥じるでしょう。」

1A 主イエスとの出会い 1-21

そういったことを踏まえながら、パウロの初めの弁明、同胞のユダヤ人たちに対する証しを呼んでいきましょう。

1B 同胞への共感 1-5

¹「兄弟ならびに父である皆さん。今から申し上げる私の弁明を聞いてください。」²パウロがヘブル語で語りかけるのを聞いて、人々はますます静かになった。そこでパウロは言った。

かつてステパノが、最高法院で弁明した時にも、同じ言葉で語り始めました(7:2)。これは、ユダヤ人の間で、同じ兄弟であり、また年長の人々は父なのだ、同じ家族なのだという親しみを込めた、

呼びかけの言葉です。相手への敬意を示しています。さらにパウロは、ヘブル語で語り始めました。集まっている人々は、離散の地から来ている人々も多いのでギリシア語もできるでしょうが、しかしユダヤ人たちの集まっているところではヘブル語です。それで、彼らはますます静かになって、パウロの言葉に聞く耳を持ったのです。外国で騒ぎを起こしている者という噂があったけれども、パウロは彼らの仲間なのだということが、彼らに伝わったのです。

³「私は、キリキアのタルソで生まれたユダヤ人ですが、この町で育てられ、ガマリエルのもとで先祖の律法について厳しく教育を受け、今日の皆さんと同じように、神に対して熱心な者でした。

パウロは、ここエルサレムにおいて、律法に熱心なユダヤ人であったことを紹介しています。ギリシア文化の濃厚な、キリキアのタルソで生まれましたが、エルサレムで育てられました。おそらく、ユダヤ人として成人とみなされる 12 歳、13 歳の頃からでしょう。そこで、当時、パリサイ派のラビとして非常に高名であったガマリエルの下で教育を受けています。ガマリエルについては、使徒 5 章にて、最高法院の中で、この道、イエスの弟子たちのことについては、神からのものかもしれないから、ほおっておきなさいと言った人です。

パウロが、ここで神から備えられた背景であったことが分かります。彼は、第一に聖書に通じていました。特に律法について熱心なパリサイ派の中でも熱心さは断トツでした。ゆえに、彼はまず、聖書に預言されて、律法に証しされているキリストをよく知っており、イエスこそがキリストであることを知っていました。そして、律法というのが、行いによって神によって義と認められるものではないことを、律法に熱心であったからこそ知っていました。律法によっては罪の意識しか生まれず、キリストが、律法に違反した者に要求されている死を十字架によって満たすことによって、律法を完成されたことを知っていたのです。ですから、どこに行っても、聖書から論じて、イエスこそがキリストであることを力強く証言することができたのです。

神に備えられた第二の背景は、ローマとギリシア文化に濃厚なタルソで生まれたということですが。当時のローマ社会には、ローマになる前のギリシアの時の文化と言葉、思想などが深く浸透していました。アテネなど同じように、ギリシア哲学を学ぶことのできる機関がタルソにもありました。パウロは、それゆえに異邦人の世界をも熟知して、その枠組みの中で福音を語ることができました。

⁴ そしてこの道を迫害し、男でも女でも縛って牢に入れ、死にまでも至らせました。⁵ このことについては、大祭司や長老会全体も私のために証言してくれます。この人たちから兄弟たちに宛てた手紙まで受け取って、私はダマスコへ向かいました。そこにいる者たちも縛り上げ、エルサレムに引いて来て処罰するためでした。

彼は律法に熱心であったゆえに、今、パウロに対して行っている迫害、その熱心さも彼らと同じ

だったのです。パウロは、彼らが無知のゆえにそうなのだということを知っています。自分がそうだったからです。ローマ 10 章でこう論じています。「10:2-4 私は、彼らが神に対して熱心であることを証しますが、その熱心は知識に基づくものではありません。3 彼らは神の義を知らずに、自らの義を立てようとして、神の義に従わなかったのです。4 律法が目指すものはキリストです。それで、義は信じる者すべてに与えられるのです。」熱心な人であればそれだけ、神の義から離れてしまうという皮肉は、しばしばあります。キリスト者も、キリストご自身から義の基準がずれてしまうと、その熱心さによって、まるで真実なことから離れてしまいます。

こうやってパウロは、エルサレムに集まってきたユダヤ人たちに、実は自分はあなたがたの中にいた人間なのだ、そしてその中でイエスに出会ったのだということをお話しています。証しというのは、イエスを証しすることです。イエスが神の恵みによって自分に会ってくださった証しです。ですから、それ以前の生活についても語ります。そして、その以前の生活を話す中で、証しを聞いている人々は、自分たちと境遇は同じなのだとか共感できたはずですが、私たちが証しをする時に、最も大事なものは、「そのままの自分に、イエスが来られた」ということです。その、そのままの自分というものが、他の人々も共有することであり、そのことによって、「人々の間に住まわれた」という、肉体を取られた神、イエス・キリストのお姿を指し示すことができます。

2B 天からの光 6-11

⁶ 私が道を進んで、真昼ごろダマスコの近くまで来たとき、突然、天からのまばゆい光が私の周りを照らしました。⁷ 私は地に倒れ、私に語りかける声を聞きました。『サウロ、サウロ、どうしてわたしを迫害するのか。』

エルサレム旧市街に行きますと、北にある門に「ダマスカス」門というのがあります。エルサレムを出て、シリアのダマスコに行くのにその門が使われたところから由来していますが、パウロが、大祭司と長老会全体からの手紙を携えて、その門を通過して北に向かったのかもしれませんが。

ダマスコの近くまで来たら、なんと真昼なのに、それ以上の光をもって、天からのまばゆい光がパウロを照らします。復活されたイエスがパウロに現れてくださったのです。ユダヤ人たちにとって、神からの啓示として、天からのしるしがあることはよく知られていることです。ダニエルが、その一人でした。彼は、ティグリス川のところにいた時、光り輝く一人の人がいて、あまりにも輝くので、彼は力が抜け、顔の輝きも一変しました。その人の語る声を聞きながら、顔を伏せて地に倒れて、深い眠りについてしまいました。この描写は、黙示録 1 章でヨハネが見た、イエス様の栄光の姿とそっくりなので、ダニエルにもイエス様が栄光の輝きをもって現れたのではないかと考えられます。イエス様が生まれた時も、羊飼いたちに対して天の軍勢が光り輝いて彼らに現れましたね。このようにして、光をもって現れる時に、それは神の御座にある輝きであり、ユダヤ人には神からのものであると確認できるものなのです。

⁸ 私が答えて、『主よ、あなたはどなたですか』と言うと、その方は私に言われました。『わたしは、あなたが迫害しているナザレのイエスである。』

パウロは、この方が主ご自身であることをすぐに知りました。しかし、この方が誰であるかがわからなかったのです。この方はナザレ出身のイエスであり、ローマの十字架によって死んだけれども、この道の者たちがよみがえったと主張しているイエスです。イエス様が、「どうしてわたしを迫害するのか。」と言われましたが、キリストの弟子たちに迫害しているのはイエスご自身に迫害しているのと同じです。イエス様は、「マタ 25:40 これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです。」と言われましたが、そのような形でイエス様は人々にご自身を現わしておられます。

⁹ 一緒にいた人たちは、その光は見たのですが、私に語っている方の声は聞き分けられませんでした。

ダニエルの時もそうでしたが、本人はその光の中におられる方を見ることはできても、周りの人はただ恐怖が襲ってくるだけで見極められませんでした。ここではパウロだけが声を聞き分けることができましたが、同行していた人たちは、光は見たものの、声は聞き分けられませんでした。

¹⁰ 私が『主よ、私はどうしたらよいでしょうか』と尋ねると、主は私に言われました。『起き上がって、ダマスコに行きなさい。あなたが行うように定められているすべてのことが、そこであなたに告げられる』と。

パウロがすでに回心しています。「主よ、私はどうしたらよいでしょうか」と言っています。これまで、自分のしていることを全力で行っていた者にイエス様が現れてくださったのですが、この方を主であるとし、しかも、「私はどうしたらよいでしょうか」と主導権をすでに委ねています。そして主は、パウロが迫害するために行こうと思っていたダマスコに行きなさいと命じられます。

¹¹ 私はその光の輝きのために目が見えなくなっていたので、一緒にいた人たちに手を引いてもらって、ダマスコに入りました。

パウロの目が見えなくなったので、彼には光の輝きがなくなりました。これはユダヤ人たちには、「神からの光によって、今まで自分が光っていたと思っていたことがみな暗くなった。」ということも意味します。イエス様は、「マタ 6:22 からだのあかりは目です。ですから、あなたの目が健やかなら全身が明るくなりますが、目が悪ければ全身が暗くなります。」パウロは、生粋のイスラエル人で、律法にも熱心で、非の打ちどころがないほどだったけれども、「ピリ 3:8 私の主であるキリスト・イエ

スを知っていることのすばらしさのゆえに、私はすべてを損とと思っています。私はキリストのゆえに、それらはちりあくただと考えています。」とまで言いました。

3B 兄弟による預言 12-16

¹²すると、律法に従う敬虔な人で、そこに住んでいるすべてのユダヤ人たちに評判の良い、アナニアという人が、¹³私のところに来て、そばに立ち、『兄弟パウロ、再び見えるようになりなさい』と言いました。するとそのとき、私はその人が見えるようになりました。

9章において、パウロが回心した話が初めて出てきますが、そこではアナニアについて、キリストの弟子であるということだけをルカは言及しています。けれどもここでは、「律法に従う敬虔な人で、そこに住んでいるすべてのユダヤ人たちに評判の良い、アナニアという人」と紹介しています。この道の人たちが、ユダヤ人であれば律法を重んじているということを伝えたかったのだと思います。

この、ユダヤ人たちから評判の良いアナニアが、預言のことばを語り、パウロが再び見えるようにさせました。ユダヤ人の兄弟によって、パウロの回心に確認が与えられたのです。

¹⁴彼はこう言いました。『私たちの父祖の神は、あなたをお選びになりました。あなたがみこころを知り、義なる方を見、その方の口から御声を聞くようになるためです。¹⁵ あなたはその方のために、すべての人に対して、見聞きしたことを証する証人となるのです。』

アナニアは強調しました、「私たちの父祖の神は」ということです。アブラハム、イサク、ヤコブの神、イスラエルの神です。この方が、パウロを選ばれました。初めに、御心を知ることです。それは、後でパウロは明かしますが、ユダヤ人だけでなく、異邦人にも神の国の相続が与えられているということです。それをパウロは奥義と呼び、エペソ書でこう言いました。「エペ 3:6 それは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人も共同の相続人になり、ともに同じからだに連なって、ともに約束にあずかる者になるということです。」

そして、「義なる方」というのは、キリストご自身のことです。ステパノの殺害に賛成したパウロですが、パウロは、ステパノがイ、エス様が義なる方だと言っているのを聞いていました。「7:52b 今はあなたがたが、この正しい方を裏切る者、殺す者となりました。」この方を見て、そして、この方の口から聞くようになるため、だということです。

この選りを見ると、預言者モーセのような選りであることを思います。モーセは、神から「出エ 33:17b あなたはわたしの心にかない、あなたを名指しで選り出したのだから。」と言われました。そして神と顔と顔を合わせるように語り、神から声を聞いていました。ですから、ユダヤ人の聴衆は、確かにパウロは神に選ばれた器なのだということを認めざるを得ない力強い証言なのです。

そして、その見聞きしたことを証しすることがパウロに対する主の命令、召しでありました。しかし、これはキリストに捕らえられた者たちみなに、与えられている召しです。私たちが霊の戦いをしており、悪魔からの攻撃があっても、打ち勝つことができるのは、「子羊の血と、自分たちの証しのことばのゆえに竜に打ち勝った。」と黙示録 12 章 11 節にあります。

¹⁶ さあ、何をためらっているのですか。立ちなさい。その方の名を呼んでバプテスマを受け、自分の罪を洗い流しなさい。』

ここで大事なことは、イエスの御名を呼び求めるところで救われます。「ロマ 10:13 主の御名を呼び求める者はみな救われる。」そして、水のバプテスマを受けることによって罪が洗い流されるのではなく、罪の洗い流しが確認されるのです。確かなものとされるのです。「I ペテ 3:21b バプテスマは肉の汚れを取り除くものではありません。それはむしろ、健全な良心が神に対して行う誓約です。」ちょうど、結婚式において男女の結婚が確認されます。けれどもその前に二人は既に結婚することを決意しています。それと似ていますね。

4B 召命 17-21

¹⁷ それから私がエルサレムに帰り、宮で祈っていたとき、私は夢心地になりました。

ダマスコの途上での体験から、アラビア地方に行ったことがガラテヤ書 1 章にあります。それからエルサレムに帰りました。そして、パウロが神殿で祈っていた、というところで再び、彼はまじめなユダヤ人であることが分かります。神殿をないがしろにしています。そして、神殿において、主からの啓示を受けます。夢心地になりました。かつて預言者たちにも、神殿の中で主が現れたサムエルがいました。やはりここでも、ユダヤ人が聞いたら、自分たちの間で啓示が与えられた、と分かるはずですが。

¹⁸ そして主を見たのです。主は私にこう語られました。『早く、急いでエルサレムを離れなさい。わたしについてあなたがする証しを、人々は受け入れないから。』

ダマスコの途上で復活の主イエスが会われただけでなく、神殿の中でも主が現れてくださっていました。そしてパウロは、あなたの証しは受け入れられないと言われます。かつて、イザヤも、主が王座に着いておられる幻を見て、民がイザヤの預言に耳を閉ざすことを前もって言われていました(6:9-10)。使徒 9 章では、ギリシア語を使うユダヤ人と論じていたところ、彼らがパウロを殺そうとしていたので、それを知った兄弟たちが、パウロをカイサリアに連れて行き、タルソ行き船に乗せたとあります。主が、急いで離れなさいと言われたのは、命の危険があったからです。

¹⁹ そこで私は答えました。『主よ。この私が会堂ごとに、あなたを信じる者たちを牢に入れたり、むちで打ったりしていたのを、彼らは知っています。²⁰ また、あなたの証人ステパノの血が流されたとき、私自身もその場において、それに賛成し、彼を殺した者たちの上着の番をしていたのです。』

ペテロがかつて、天からの風呂敷を、汚れた動物を屠って食べなさいと言われた時に、「10:14a 主よ、そんなことはできません。」と答えましたが、パウロもここで、「主よ」と言いながら、反論しています。パウロには、こんな迫害者が変えられたのだから、その証しを受け入れてくれるはずだと思っていました。私はとても共感できます。私も、自分が変えられたのだから、イエスはすごいと言ってくれるはずだと期待しました。ところが、その反対のことが起こりました。信じる前は、人との付き合いができずに、自分のことしか考えずに、それで文句を言われることもありました。ところが、イエス様を信じて、大学の仲間には「柔らかくなったね」とか言われました。けれども、それがクリスチャンになったからだと話すと、顔が硬直します。あからさまに嫌がられることもありました。

²¹ すると主は私に、『行きなさい。わたしはあなたを遠く異邦人に遣わす』と言われました。」

主がパウロに召しておられたのは、彼の考えとは全く違いました。先にアナニアが、15 節で「すべての人に対して」と言っていたのを思い出してください。すべては、すべてなのです。ユダヤ人だけでなく異邦人も、なのです。パウロは、自分が好き勝手に異邦人にキリストの教えを教えているのではなく、神殿に現れた主ご自身がそう言われたからなのです。

召しというのは、このように自分の思いを超えたところにある、神の御心です。自分は、普通で考えたらこうでしょう、と思うところが、神はそうではない、こちらに行きなさいと言われることがあります。自分の思いを超えて、主は召しておられます。宣教会議に参加すると、世界地図のどこにあるのか分からない国に、召されて、導かれ、教会を開拓したという証しを、多く聞きました。

2A 選り別たれた器 22-30

1B 生まれる前 22-29

²² 人々は彼の話をごこまで聞いていたが、声を張り上げて言った。「こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしておくべきではない。」

ここまでパウロが話していて、聞いている人々、ユダヤ人には納得がいくことであつたはずですが。しかし、彼らは「異邦人」という言葉を聞いて、それで怒り散らしました。自分たちの宗教、ユダヤ教を経ることなく、そのまま異邦人に福音が届くということがあつてはならないことだったので。異邦人も改宗して、割礼を受けて、モーセの律法を守ってこそ神の国に入れるのだと信じていました。彼らが許せなかったのは、律法という隔ての壁を壊されたイエス様の働き、十字架の上での働きでありました。「エペ 2:12-13 そのころは、キリストから遠く離れ、イスラエルの民から除外され、約

東の契約については他国人で、この世にあって望みもなく、神もない者たちでした。¹³ しかし、かつては遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスにあって、キリストの血によって近い者となりました。」どうしても、壁がなければいけないと彼らは考えていたのです。

²³ 人々がわめき立て、上着を放り投げ、ちりを空中にまき散らすので、²⁴ 千人隊長は、パウロを兵営の中に引き入れるように命じ、なぜ人々がこのように彼に対して怒鳴っているのかを知るため、むちで打って取り調べるように言った。

千人隊長は、彼らの言葉、ヘブル語が分からないので、何が起きているのか把握できていません。それで、むち打ちによって取り調べようとしています。ローマのむち打ちには、いろいろな種類がありますが、私たちのよく知っているのは、ギリシア語で「フラゲッロー」というむち打ちです。映画「パッション」に出て来た、鞭と呼んでいいのか？首をかしげるような恐ろしいものです。革ひもの先に金属片や骨のかけらで重みをつけたもので、むち打つと、文字通り肉片が飛び散ります。目に鞭が当たるものなら、目が飛び抜けるほどのものです。このむち打ちを受けた者は、失血で途中で死んでしまう者もいるほどです。イエス様は、このむち打ちを受けられて、イザヤが預言したように、「53:5 その打ち傷のゆえに、私たちは癒された。」のであります。

ここでのむち打ちは、「マスティゾー」と呼ばれるもので、2本の柱に両手両足をくくりつけられ、上半身を裸にされ、拷問的な道具でむち打たれることを意味します。フラゲッローのような恐ろしさはありませんが、それでも拷問であることには変わりありません。

²⁵ 彼らがむちで打とうとしてパウロの手足を広げたとき、パウロはそばに立っていた百人隊長に言った。「ローマ市民である者を、裁判にもかけずに、むちで打ってよいのですか。」²⁶ これを聞いた百人隊長は、千人隊長のところに行って報告し、「どうなさいますか。あの人はローマ市民です」と言った。²⁷ そこで、千人隊長はパウロのところに来て言った。「私に言いなさい。あなたはローマ市民なのか。」パウロは「そうです」と答えた。²⁸ すると千人隊長は言った。「私は多額の金でこの市民権を手に入れたのだ。」パウロは言った。「私は生まれながらの市民です。」²⁹ そこで、パウロを取り調べようとしていた者たちは、すぐにパウロから身を引いた。千人隊長も、パウロがローマ市民であり、その彼を縛っていたことを知って恐れた。

パウロは以前、ピリピにおいてむち打ちを受けた時、長官たちにローマ市民であるのに、裁判にもかけないで、むち打ったとして抗議しましたが、ここでは、その前に伝えています。私たちは、市民権は当たり前のようになっていますね。日本国民として、国籍を持っていることは当たり前。選挙も、婚姻も、家など何かを所有することも、裁判を受けることも、当たり前権利が与えられています。けれども、ローマの社会では違います。人々の多くが奴隷であり、これらの権利は持っていませんでした。市民権は、ここで千人隊長がそうであったように、多額の金で手に入れることもでき

ましたが、何とパウロは、両親が市民であったのです、生まれながらの市民でした。市民にむち打ったら、厳罰です。縛っていたことさえも、恐れていたとありますね。

こうして、パウロはローマ市民として、数々の証言をこれからしていきます。総督の前で弁明し、そしてカイサルにまで上訴します。使徒の働きには記録されていませんが、皇帝の前でもキリストを証したことでしょう。こうして、彼は生まれた時から与えられていた神の恵みで、キリストの証しをすることができたのです。ガラテヤ書 1 章で彼は、こう言いました。「1:15-16a しかし、母の胎にあるときから私を選び出し、恵みをもって召してくださった神が、16a 異邦人の間に御子の福音を伝えるため、御子を私のうちに啓示することを良しとされた」母の胎にあるときから選ばれたのだ、恵みをもって召してくださったのだと言っています。

みなさんも、生まれる前から神が恵みをもって召して下さっていたのです。自分にとっては当たり前のこと、時に否定的な出自があるのかもしれませんが。けれども、神はそれをもご自分の恵みによって選び出すための背景としておられるのかもしれませんが。

私は、日本人に生まれたことが、クリスチャンになってから嫌でした。日本にはクリスチャンが少ないからです。けれども、宣教の働きに関わってから、神は恵みをもって私を日本人にしておられることを知りました。なぜなら、日本は世界一の旅券を持っています。ビザ(査証)なしで入国をさせてくれる世界の国々は、191 カ国です。そして、政治的にアメリカ人や韓国人はクリスチャンが多いので、宣教活動を疑われます。けれども、日本人がまさか宣教のために来ているとは疑われにくいのです。少ないからこそ、神が用いられるということがあるのです。

2B 信じる前 30

³⁰ 翌日、千人隊長は、パウロがなぜユダヤ人たちに訴えられているのか、確かなことを知りたいと思い、彼の鎖を解いた。そして、祭司長たちと最高法院全体に集まるように命じ、パウロを連れて行って、彼らの前に立たせた。

千人隊長は、今度は、最高法院に集まるように命じます。パウロがかつて、議員であったところからです。次回、23 章で学びますが、パウロはよく知っているがゆえに、ここでも効果的に証しを立てることができました。キリストのゆえに、自分のすぐれたことはみな損と思うようになったとパウロは言いましたが、けれども、それらが全く用いられないということではないのです。むしろ、キリストのゆえに損と思っている者たちには、信じる前のことも神の恵みとして現れるのです。

このようにしてパウロの証しを見てきました。みなさんは、証しをする備えができていますか？みなさんの人生そのものが、神の恵みによる選び分けなのです。そこにおられるキリストをぜひ分かち合ってください。